

子供のための読み物だと思ったら大間違い 読んでください、偉人伝！

立派な仕事を成し遂げた偉人の人生には「山あり谷あり」以外にも、醜聞あり、クヨクヨ悩む姿ありと、人間味に溢れている。そんな姿に魅せられて伝記の本まで書いてしまった仲野徹さんに「偉人伝のススめ」を聞いた。

大阪大学大学院教授

仲野 徹

●なかの・とおる 1957年大阪府生まれ。専門は生命機能研究など。目指すはお笑い系研究者。著書に『生命科学者の伝記を読む』（学研メディカル秀潤社）、『エビジェネティクス 新しい生命像をえがく』（岩波新書）などがある。

伝記にも流行り廃りあり

僕は読書が好きで、中でも伝記を読むのがとりわけ好きなんです。アメリカで大きいめの本屋さんに行くのと、伝記ばかりを集めた棚って必ずあるんです。そこにはまさに偉人伝という話から芸能人のスキヤンダラスなものまで、いろいろ並んでいます。

けど、日本で伝記専用の棚を置いている本屋さんというのは、ほとんどないんじゃないかな。

——日本で伝記というと、子供の道徳教育のための本というイメージがあります。

たしかに児童書の棚には子供向けの伝記コーナーがあったりしますが、子供用となると、耐えに耐え抜いた末に何かを克服したとか、努力

かりますけど、きれいことだけじゃなく、もつとむちゃくちゃなことも含めて偉人の人生全体がきちんと書かれていたら、子供も「これなら自分も、いけるかもしれない」となるかもしれないと思うんですけれどね。

その子供向けの偉人伝にも、流行り廃りがあるんですよ。

——子供のころに読んだ偉人伝といえば、野口英世、シュバイツァー、ヘレン・ケラー……。

一昔前まではダントツでいちばん人気だった野口英世は、いまはベストテンにころうじて留まっているくらいのはずです。



『なかのとおるの生命科学者の伝記を読む』(学研メディカル秀潤社)

シュバイツァーの凋落には目を覆うべきものがあります。昔はシュバイツァーの伝記に感動して医学部を志した学生なんかもいたんですけど、そういう話は、いまは全然聞きません。シュバイツァーの伝記には土人

がどうのという話が出てきたり、上から目線で医療と布教のためアフリカまで「来てやった」みたいなことを言ったりしてて（笑）、現代の価値観で見るとけっこう差別的な記述が多いんですよ。そこが読まれなくなった要因の一つでしょうね。

エジソンはいまも偉人伝の定番ですが、いずれほとんど読まれなくなるんじゃないかと読んでます。エジソンの代表的な発明といえば蓄音機と電球ですけど、蓄音機なんかもうすっかり過去のものですし、電球もLEDにかわって使われることが減っていくでしょう。そうすると、

蓄音機と電球を発明した人とか言われても、リアリティが持てなくなっていくんじゃないかと。

——そういう意味では、偉人伝の定番は時代に左右されるんですね。

数年前の朝日新聞で見たデータでは、ヘレン・ケラーやマザー・テレサ、ナイチンゲールはここ数十年、ずっと人気が高いようでした。ヘレン・ケラーのような病氣克服系や、マザー・テレサのような人道系は、魂に訴えかけるし、社会の流れにも左右されないんで、これからも揺るぎない人気を誇り続けるんじゃないかと思えます。

ただテレビゲームとかもあるし、偉人伝に限らず、本を読む子供は減っている。それはたしかだし、なんとかせんとあきません。

ネットライフ生命保険のCEOである出口治明さんという方は大変な